立場が変わると何が見える

～その6　子どもの生きる世界　～

坂口　伊都

はじめに

今年の夏、とても暑いです。暑いと言っても仕方ないのですが、言わずにはいられません。皆さま、夏バテもせず、お元気でお過ごしでしょうか。暑さの中にいるだけで、疲労します。この暑さを体感して、シエスタが日本にもいるのでは？と切実に感じるのは私だけでしょうか。

6月に元里子と娘、夫と四国水族館に行ってきました。元里子が、珍しく行ってみたいと言い出したので、それなら是非にとなりました。四国水族館は、テレビで観たそうです。元里子が覚えているかどうかわかりませんが、水族館は一緒に暮らしている時に最後に出かけた場所でした。だから、私にとっては胸がチクチクする場所で、その時から水族館に足を運んでいなかったのです。元里子に「次は、どこに行きたい？」と聞いても、「ない」「わからん」と言われることがほとんどだったので、水族館と言われたのは意外でした。一緒に暮らしている時、いろいろな水族館に行っていたので、そちらの記憶の方の印象が残っていたのかも知れません。片道3時間ぐらいかけながら、日帰りで弾丸ツアーを決行しました。

四国水族館は、それほど大きくな規模ではなく、生き物の説明がキレイに描かれていました。元里子は行きたいと言っていましたが、いざ着くとテンションが上がるわけでもなく、いつも通りに回っていました。あまり興味がないのかなと見えますが、嬉しさの表現が控えめのようです。最後にお土産コーナーに行くと大学4回生の娘がコウイカのぬいぐるみを見つけ、「これ欲しかったんだ」と言うので、記念に買ってあげようとなりました。もちろん、元里子にも好きなの選んでいいよと伝えると同じぬいぐるみのタコを選びました。仲良くイカとタコを買う大きな子どもたち。喜んでくれるなら、買う側も気持ちよく支払いができます。二人の顔を見ていると、私が救ってもらっている

のだなと感じました。この子たちを育てたことを許されたような気持になりました。

水族館の後、父のリクエストで香川名物の骨付き鳥を食べに行きました。昼食だったのですが、店に入ると食堂というより、ビアガーデンっぽい。何の情報もなくついて行ったので、甘辛い味付けかと思ったら、とてもコショウ辛くてびっくりしました。このパンチが癖になるのでしょうが、何の覚悟もなかった私たちはヒーヒー言いながらほおばり、食べ終わってからも口の中が熱いので、落ち着かせるためにアイスを売っている店を探しました。そういう時に限って店を見つけられず、やっとの思いで冷たくて甘いアイスを口に含ませると、「生き返った」と全員で大笑いしました。

前回に引き続き今回も、夫と娘、私で立命館大学主催のフォスタリング・ソーシャルワーク専門職講座で話したことを書こうと思います。前回は 2 月に話をしたことを書きました。今回は家族で話す2回目の機会を 7 月にいただきました。前回から半年も経っていないのですが、今回は里兄のコメントをもらったので、そのことについて触れました。息子のコメントは辛辣なものでした。内容については後ほど触れますが、娘が代弁をすることに決まりました。兄のコメントの内容を読んで、「賛同できない部分もあるけど、同じ子どもという立場で納得する部分もあるから、私から伝えるのがいいと思う」と言ってくれました。確かに母である私が語ると、母としての解釈がかなり入ってしまうと予想できるので、娘に任せました。今回は、子どもからみた世界を中心にお伝えできればと思っています。どうぞ、最後までお付き合いください。

里兄からのメッセージ

親子 3 人で話す 2 回目の依頼をいただき、息子に人前で話さなくてもいいから、何かコメントが欲しい。嫌だったことを書いてもらって構わないと伝えました。息子から送られてきたコメントは、息子にしては珍しく長文でした。そのコメントを読み、まずショックで眩暈がしました。見事に拒否され、その文章から怒りを感じました。そこから冷静さを取り戻すと、息子が今の生活に悩んでいるのだと伝わってきました。先の見えなさに不安になったり、上手くいかないと感じる時は、何か大きな出来事に理由を求め、楽になりたいと願います。そこに里親の経験は簡単に結びつきます。それ程、家族にとって大きな出来事だったと改めて確認できました。

息子のコメントの概略は、
親族の反対を押し切ってまで、里親をすることに反対の立場であること
その上で里親をするのなら、母親なりに秘策があるのだろうと思っていたこと
里子にいろいろ教えようと思ったけど上手くいかなかったこと

里親をして得るものは何もなかったと感じている
と締めくくられていました。

娘は、兄の文章を読み、

最初に「兄は、母を信頼しているのだ」と言いました。

私は、「？？？」。
「お兄ちゃんは、母には何らかの秘策があり、母に任せておけば何とかなるのだと信じていたと思う。」
娘からは、そんな風に読めるのかと脱帽です。

娘に、親族に里親の話をした時、何も言われず、里子との交流が進み具体的になってくると急に反対されたと説明すると、

「お兄ちゃんは、何が起きているかわかっていないし、知ろうともしていない。でも、私も兄と同じように大人の世界で何が起きているかわからなかった」と話しました。

そして、「お兄ちゃんとして、下がもう一人できることが嬉しかったのではないかな。年下のいとこが慕ってくれているような関係をイメージしたけど、同じようにできず諦めてしまったのではないかな」

「里親をして得るものは何もなかったことは、絶対にないと私は思う。お兄ちゃんは、プラスになるものしか認めようとしていないように見える。里親をしてきて、いい事もしんどい事もあったけど、そういうこと全部ひっくるめて得るものはあったし、今の私ができていると感じている。私は皆の前で話さないとならない状況に置かれて、母と打ち合わせもしたし、時系列を間違えて記憶していたとわかり、自分が知らなかった背景が見えるようになって、そういうことがあったのかと思えるようになった。兄は勘違いしたままで、家族と話そうとしてこなかったから多くの憤りを感じているのだと思う。お兄ちゃんが勘違いしたままのように、子どもは本当に大人の中で何が起こっているのかわからないし、見えない、聞いてもいけないと思って過ごしてきた。」と教えてくれました。

娘の発言、すごいなぁ。
親として、子どもを巻き込まないように、何とか守ろうとしてきたつもりですが、子どもに気を遣わせる結果になったと知りました。この話を聞いた時、申し訳なくて涙が出てきました。

息子は、里親をしたいと私が言い出した当初、反対はしていなかったと思います。
母が言い出したことを受け入れようとしてくれたのでしょう。
辛辣なコメントでしたが、私を責め立てるような言葉ではなかったところが、息子の優しさでしょうか。息子自身の今の人生に悩み、やるせない気持ちをぶつけている面も感じます。里親の経験は、家族の誰にとってもインパクトがあるもので、何か上手くいかないことの原因にしたくなります。

息子は、小さい頃から口数が少なく、いつも何を考えているのだろうと彼の中を知りたいと思い続けてきました。このコメントは、里親について初めて語った大きな一歩。
あまり家に寄り付かない息子ですが、何か困ったことがあれば帰ってもくるし、頼ってもきます。今は、それで良しとしましょう。

そして、息子がコメントをくれたことで、そこに織り交ぜられたメッセージを受けることもできました。コメントは LINE でもらったので、それに対して返信もしました。そこから、息子が何を感じたかはわかりませんが、今置かれた状況がずっと変わらないことはあり得ません。息子が、しんどそうにしていた時も、とても嬉しそうな顔をしてチャレンジしている姿も見てきました。少しでも、自分との対話ができることを願っています。

娘の人間不信

今回の講座では、娘が兄の代弁をすることになり、前回よりも娘と打ち合わせをしました。似た立場の兄妹ですが、抱いている気持ちは別物なので、兄のコメントと自分の気持ちの伝え方を悩んできました。いろいろ思案した結果、わかりやすくするため、まず娘の気持ちを先に語り、最後に兄のコメントを紹介することにしました。

娘は、自分の思いを何度となく語ってきていますが、今回の登壇で初めて涙ぐみました。
親戚や教師から家庭の様子を質問され、友達からは「私はそんなの無理」と言われ、誰も信じられなくなったと語った時でした。この人々は、娘の思いを考えようともせず、里親制度のことについて知ろうともせず、無知のまま娘の心を土足で踏みつけるような質問をしました。きっと、悪気なくしていたのでしょう。そのことが、娘の奥にある傷つき体験なのだとわかりました。
何度も語る経験をし、親の語りを聞き、第三者に受け止めてもらい、兄のコメントに触発され、やっと自分の革新部分に触れられるようになったのかも知れません。
その娘を救ったのは、高校で出会った友達でした。娘は、通学に1時間はかかる高校に進み、同じ中学からは、誰も進学していません。中学では、幼馴染も大勢いて、下のきょうだいが急に増えると不思議がられますが、高校では、きょうたいがいると言えば済み、敢えて里親をしていることを説明する必要はありません。

敢えて里親をしていることを語らなかった中で、一人だけに里親のことを話した際、その友達は、その場で里親制度について調べ始めたそうです。中学時代は、里親制度について知ろうとしてくれた人はなく、興味半分だったり、知ろうともせずに否定され、人間不信に陥りましたが、この友達は娘のことを理解したいからと調べてくれたそうです。そんな人がいるのだと知り、人を信じられるようになったと教えてくれました。

娘の話を聞き、ひどく胸が痛みました。

娘は、将来自分が里親をしたいかしたくないかと問われれば、里親をしたいと言います。でも、自分に子どもがいたらしないと思うとも話していました。

率直な気持ちが、嬉しくも、悲しくも感じます。

人の前で里親家族として感じてきたことを語りを聞くと、驚かされることが毎回あります。

里子を含めて、「家族」が生き物のように変化し続けているのだとわかります。

常に生きている私たち一人ひとりが、里子と別れた後も物語を作り続けていました。

一緒に暮らしている時、里子を「家族」と感じていました。

久しぶりに出会うと、今は元里子に何の権限も持っていないボランティアですが、家族の感覚が蘇ってきます。

不思議なのですが、自分の父親よりも里子の方が家族の感覚があります。父とは一緒に暮らしたことがなく、生物としての父親だという理解はありますが、家族と言われるとピンときません。他界しているので、この感覚はそのまま変わることは難しいと感じます。「あなたの家族を思い浮かべてください」と聞かれたら、父親よりも先に里子の顔が浮かびます。

父とは孫を含めて交流してきましたが、お互いによそよそしさがありました。父が歩みよろうとした時、私はそれを受け入れられなかったし、その逆もありました。私たち親子は、阿吽の呼吸どころか、一つの歯車を噛合わせることも上手くできずにいたのだと思います。

私も父も出会っている時、会話が弾むことは少なく、お互いに会話に困っていました。よく話すタイプならいろいろなことを話せたかもしれませんが、会える回数が少ない上にその時間を有意義に過ごせなかったと感じます。

第三者に父と一緒に父子関係を話す機会があったら、この感覚は変わったかも知れませんし、お互いをもっと近くに感じられたのではないか。そうと考えると、とても勿体ないことをしたなと感じます。もっと近く感じられたかも知れないのにと。

守っていると感じているのは大人だけ

娘と息子の語りから、大人になるにつれ、子どもの頃の感覚が薄らいでいき、記憶は置き換えられていくものなのだと改めて知りました。

子育てをしていく中で、子どもを大人のいざこざに巻き込まないように必死に守ってきたつもりでいましたが、子どもから見れば大人は何も教えてくれない。自分たちはいつも蚊帳の外に置かれ、そのことについて尋ねてはならないというサインを読み取り、断片的に見えるものから自分なりに推測するしかない。その行動が、大人の顔色を読む学習になります。

私自身も子どもの頃、大人の行動に理不尽さを感じ、怒りを持っていましたが、親になってから自分も子どもに同じようなことをしていました。本当に皮肉なものです。

では、何でもかんでも子どもに伝えれば、それが誠意になるのかと問われれば、それは違うと思います。子どもにどこまで言って、言わないかの線引きは難しいということだけはわかりました。子どもに言っても言わなくても、大人に反発心を覚えることは避けられないのかも知れません。この世は、不条理に満ちています。大人であっても、どうしようもできないことは山程あります。

小さい頃、親や大人は絶対的な存在で、全てを委ねられる相手でしたが、大人も万能ではないことを大人自身が認識することから始まるのではないかと感じています。子どもよりも経験を積み、自分ができなかったこと、失敗したことをさせないようにと行動したくなりますが、子どもの行く手にレールを引くと、子どもが身に着ける力をそいでしまうことになります。子どもの権利を守ろうとするなら、大人自身の構えから見直すことから始まるのだと教えられました。大人になった子どもたちから、語りのカウンターパンチをもらって、わかりました。人生のレッスンは、どこまでも続くものだと知りました。 わかっているつもりになって、結局わかっていないことに気づく。大人になっても未熟なままです。この世の中のことをわかったつもりになって子どもと接すると、失敗させないようにさせてようと必死になり、失敗したらやり直しがきかなくなると訴えてしまいそうになります。大人でも未来が見えているわけではないことを示し、子どもと一緒に悩み考える人でありたいと感じています。